

【大会式典】



午前は、全国手をつなぐ育成会連合会統括 田中正博氏より中央情勢報告があり、午後からは、「国立のぞみの園の高齢化への先進的取り組み」をテーマに、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園・総務企画局事業企画部 部長 古川慎治氏による講演会が行われました。

のぞみの園は、平成15年に独立行政法人化され「終生保護」から「重度の知的障害者に対する自立のための先導的かつ総合的な支援の提供」に役割が変わり、出身地が全国規模である利用者の地域移行に取り組むこととなり、原則、故郷の地域に帰ってもらうことになったそうです。

地域移行は、「障がい程度に関係なく、入所者全員が対象で、本人の意向を尊重し、家族の意向を聞いて納得を得ること」「経済的負担も含めて家族に負担をかけないこと」「きちんと支援できる体制を整えた上で移行すること」「移行先での生活の継続が困難になった時には、のぞみの園への再入所も対応方法の一つに入れること」これらのことを原則として支援を行い、174人の人達が出身地へと帰って行かれましたが、その中で施設に戻って来られたのは、医療的ケアが必要になった5人だけとのことでした。その人達も地域での暮らしの方が良かったのか「戻って来たくなかった」と言っておられたそうです。

【シンポジウム】



地域移行は、地域に移ることが目標ですが、目的ではありません。本当の目的は、移った後に本人が今ま

でより幸せに暮らせること、大切なのは「移った後」が幸せであることです。そのためにも本人が様々な変化に対応していけるか、無事に暮らし続けることができるかを確認するためのフォローアップ（定着支援）が大切だと話されていました。

最後に、どこで、誰と、どのように暮らすのか・・・自分の人生は自分で決めてもらう。それは障がいがあっても、なくても変わらない大切なこと。それを支える私たちの役割において「意思決定」の大切さを改めて感じていると結ばれました。

その後は「地域・家族・専門職ができること」と題してのシンポジウムが行われました。国立のぞみの園サービス調整企画課 課長補佐 清水清康氏と北摂杉の子会 地域生活支援部 部長 平野貴久氏も登壇され、清水氏からは、「グループホームにおける高齢知的障害者への支援について」、平野氏からは、「グループホーム利用者の医療的対応について」のお話がありました。

【本人大会決議宣言】



入居者の高齢化、重度化に応じた環境整備や支援体制を構築されていることや、医療、看護、保健等の地域の専門職との連携が重要であること、本人の応援団（家族、医療、事業所関係者等）は多い方が良く、本人を中心に会議を開き、本人の意思を確認して支援を考えていること等をお聞きました。また、障害者入所施設は、高齢者対応にはなっていないので、個別対応や医療対応ができる介護施設（介護保険）に上手くつなげていくことが必要だということでした。

大会を終え、親子の高齢化に向けて何をすべきか考えた時、本人の記録を文字にして支援者に伝えられるようにしておくこと、本人を中心としたネットワークづくり等々がありますが、古川氏が言われた「愛情と思い出を残してあげて下さい。」の言葉が心に残りました。わが子が、それを胸に抱き続けてくれるように、「元気なうちに親子でたくさんの思い出作りをしておこう！！」と思いました。